

小説『女子的生活』にみるジェンダー表現

—トランス女性・ミキのファッションを手がかりに—

大淵裕美・雄崎那知

(神戸女子大学家政学部家政学科)

はじめに

近年、様々な分野で多様な性のあり方が認知されつつあり、セクシュアルマイノリティに対する差別を解消する動きが世界中に浸透しつつある。その動きに伴い、男女の枠組みをなくそうという考えも広まりつつある。特にその傾向が表れているのが、ファッション産業である。井手上獏やゆうたろうなどの「ジェンダーレス男子」の流行や、大手ブランドのGUが「あらゆる人がファッションを楽しめるブランド」¹をコンセプトにジェンダーレスなアイテム提案を強化している。

こうした社会変化に呼応するように、ジェンダーレス男子の先駆けとして1990年代の「フェミ男」を取り上げ「男らしさ」の観点から検討する研究（小川2018）や、全国紙三紙の記事を対象に「ジェンダーレス」という言葉が服飾分野で用いられる際の言説分析を行う研究（新實2019）などが取り組まれている。新實（2019）によると、ジェンダーレスな服飾は、「性の標識性や表象を有しない服装」（新實2019：47）と定義できるものの、具体的なデザインのレベルで見ると、身体線を強調しないデザインの重用などにより服装で性別をあいまいにするものもあれば、女らしいとされるイメージを持つ色調・模様・素材・装飾などを男性服のデザインに活用したり、男性服に起源がある衣類を女性が利用しやすいようにデザインを工夫して着装されるなど、「ジェンダーレスといえども、その装いが意味するものや役割は性別によって異なる部分や差異が存在している」（新實2019：47）。新實は「ジェンダーレス」という服飾の中に「男性らしさ」の多彩さを打ち出したり、「女性らしさ」が産出され増幅される傾向があることを指摘している。しかしながら、男女というカテゴリーの枠の中にとどまりながら、それぞれの性別の端の端に自らを位置づけつつ、「他者との相対的な性別の位置取りを変え、性別カテゴリーの境界線の越境や再設定をおこない、それらが他者から承認されることを反復するという相互作用」（土肥2019：124）のなかで徐々に性別変更を行うトランスジェンダーにとっては、ジェンダー表現の選択肢が増すという点で意義あることだと言えよう。

トランスジェンダーに関する研究は、当事者のライフストーリー（福岡・黒坂2007）や学校内での性別変更をめぐる実践過程（土肥2019）、映画におけるトランス女性の表象分析（堀2019）、「性別を見る」という視点から検討を行った研究（鶴田2004、鶴田2009）などが挙げられる。本研究では、これらの先行研究を踏まえながら、トランス女性の日常を描いた小説『女子的生活』を題材に、彼女のアイデンティティの変化とファッションに着目して検討する。

ファッションに着目する理由は2つある。ひとつは、小説というフィクションであるとはいえ、トランス女性のファッションに関する詳細な描写があり、トランス女性は何をどのように考慮しながら着衣を選択するのかを分析可能だからである。もちろん、全てのトランス女性が本稿で検討する『女子的生活』の主人公のようなファッションを希望しているとは言えない。例えば、福岡・黒坂（2007）で自身の外見について語った当事者は、小学校高学年の頃はスカートを身に着きたいという気持ちがあったが、カミングアウトをし、性別変更・女性ホ

¹ 「GUNEWS 2021年秋冬シーズンの新ウェブCMを公開新キャストを迎え、「あらゆる人」へファッションの楽しさを届ける」<https://www.gu-global.com/jp/ja/corp/company/pressrelease/pdf/cms/newcast2021FW/>, 最終アクセス 2022. 03. 01

ルモンの投与をした後では、一番好きな恰好である「ユニセックス系の女性」という服装をしている。また、土肥 (2019) のインタビュー対象者であるトランス女性の当事者は、性別変更実践の過渡期であった高校生の頃は、服装やしぐさなどのジェンダー表現を限りなく女性に近づけてはいたものの、スカートなどの「女性のアイコン」を身に着けていたわけではなかった。このような点を考慮しても、『女子的生活』の登場人物の記述を分析することは、トランス女性の服装に関する意識を理解するうえで一定程度の意義があると考えられる。

もうひとつは、トランスジェンダーのパッシングを理解するうえでファッションが重要な要素であるからである。鶴田 (2004) によると、トランスジェンダーが自己呈示をする場合、「一瞥で「本当に」に「ノーマルな外見」を持つ者だと見てもらうことを、達成し続けること」(鶴田2004: 33) がパッシングにおいて最重要課題という。それは、「性差の特徴をはっきりと示したり、隠したりする衣服の機能は、ファッションを選ぶ重要な要因である。衣服はその意味を知る人にも知らない人にも何かを伝える。スタイルは人々の注意をひき、かつ一定の方向へと誘導することができるのだ」(Finkelstein1996=2007:136) というフィンケルシュタインの言明とも呼応する。

そこで本研究では、小説『女子的生活』の主人公であるトランス女性・ミキに焦点を当て、彼女のアイデンティティの変化とファッションを検討する。まず、分析対象である小説を概観し(1節)、トランス女性としてのミキのアイデンティティの変化を検討する(2節)。次に、ミキのファッションに注目し、トランス女性として自覚してからファッションを模索していた時期と現在のファッションについて詳述する(3節)。最後に、ミキにとってのファッションの意義を中心に考察したい(4節)。

1. 研究目的

『女子的生活』とは、坂木司による日本のライト文芸連作短編小説である。文芸誌『yom yom』の読み切り競作企画「ふたりぐらし」の第3回として2013年春号に掲載された短編小説『女子的生活』が好評を博したことで、全6回の連載化、2016年8月に新潮社より刊行された。また、2018年1月にはNHKでドラマ化され、志尊淳が初のトランスジェンダーの役を演じるということで話題になった²。本論文では、セクシュアルマイノリティの主人公ミキに着目する。主人公のミキは、東京に暮らしアパレルメーカーに勤務しており、女性の心を持ちながら男性の体であり、恋愛対象は女性というトランス女性のレズビアンである。ミキは成り行きで一緒に暮らすことになった高校時代の同級生の後藤というヘテロの男性と共に暮らしながら、マウンティング、モラハラ、毒親、婚活など様々な問題に立ち向かい、「思いっきり『女の子ライフ』を満喫する」(28) 日々が描かれている。

2. トランス女性としてのアイデンティティの獲得

2-1. 「女の子が好き」で「可愛い格好がしたい」

ミキが自分の性に目覚めたのは、中学生から高校生の始め頃である。「女の子が好き」だけど「可愛い格好が、したくなった」(204) のがきっかけである。中学時代は自分の性のあり方に対して混乱し、周囲に全く相談できずにいた。一歳違いの兄に気づかれ、「キモイ」と言われて以降、自己否定を繰り返していた。高校生になり自分専用のPCを入手すると、セクシュアルマイノリティやトランスジェンダーという言葉と出会い、SNSを開始して他者とつながるようになる。次第に「私、悪くないんじゃない？」と自分の性のあり方を肯定的にとらえられるようになった。進路について親に話をしようとしたところ、兄からアウトイングされることがきっかけで、両親にカミングアウトをすることになる。両親は、ミキの状況を理解したものの、家族会議の結果、実家では女性の服は着ない取り決めとなった。

「可愛いものを追求するため、服飾学科」(210) のある東京の専門学校に進学したミキは、「ともちゃん」と

² 「ドラマ10『女子的生活』」[NHKドラマ]、<https://www6.nhk.or.jp/drama/pastprog/detail.html?i=4670>、最終アクセス2022.03.01

出会う。ともちゃんは、トランス女性で恋愛対象は男性という人物であり、メイクを得意としている。専門学校時代の途中からミキとルームシェアを行い、卒業後、メイクアップアーティストのアシスタントになった。ルームシェア時代には、洋服選びが得意なミキが服を選び、ともちゃんがメイクをするなどお互いにサポートしながら楽しく暮らしていた。ともちゃんに彼氏ができたためルームシェアを解消するが、「今の私があるのは、ともちゃんのおかげ」(12)と語るように、現在のミキを形成する上で欠かすことのできない重要な存在である。

2-2. 「自由で強くて可愛い、女の子」

「私は女の子になりたい」(58)と語るミキは、どのような女性を理想としているのだろうか。それが明確に表れているのは、合コンで出会った「ゆい」とのデート中に自分の理想について考えているシーンである。

そういえば私のドリームは、いつもどこかアメリカ寄りだ。たぶん、海外ドラマやリアリティ・ショーの影響だと思う。

最初にそれを見たのは実家のリビングだった。昼下がり、母親が何気なく見ていた再放送のドラマ。その中に、彼女たちはいた。

テレビの中の女の子は、大学生という設定だった。なのにお酒を飲み、タバコを吸い、セックスをしていた。ケンカになれば相手を思いっきり罵り、腕力に任せたバトルを繰り広げる。よく泣いて、よく笑って、よく食べて、それが、特別ではない女の子の物語として描かれていた。

(なんて自由で、強くて、可愛いだろう——)

将来どころか、一生が透けて見えるような地方都市の片隅。学生服のまま、リビングで「僕」は立ちすくんだ。詰め襟の息苦しさの理由が、分かった気がしたのだ。

(こうなりたい。)

漠然とした憧れが、その時形になった。

(自由で強くて可愛い、女の子になりたい。)(81)

ミキは自分の性に気がついてから、「女の子になりたい」「可愛い格好がしたい」という漠然とした憧れはあったものの、具体的に何を目指したらよいか悩んでいた。そんな時に、自宅のテレビに映る再放送のアメリカドラマを見て、雷に打たれる。自分のあいまいな憧れが、「自由で強くて可愛い、女の子になりたい」と具現化した瞬間であった。と同時に、「詰め襟」という男子「学生服」の息苦しさ、つまり「男の子」という自身の身体的性差や、環境から強制されている性表現への違和感にも気がつくことになる。

2-3. 「ブス」から「モデル」へ

「自由で強くて可愛い、女の子」という理想像を得たミキは、自分の身体的特性という現実との間で悩みつつ、努力を重ねていく。実家にいた頃のミキは、自分を「ブス」「鷺鼻」「平たい胸」「(高)身長」と「コンプレックス」の塊としてとらえていた。東京の専門学校に進学し、ともちゃんと出会いメイクやファッションを試行錯誤していく。当初は「化け物みたい」(161)な外見で男性から「物か」ってくらい無視されていた(13)が、ともちゃんとの「メイクの実験」(12)や「思いっきりお洒落」(13)という日々の努力の結果、「ちゃんとできたメイクやお洒落」ができるようになる。こうした努力の末に獲得した外見の変化は、ミキのコンプレックス解消につながると同時に、男性の態度の変化も引き起こす。

ちゃんとできたメイクやお洒落って本当にすごい。ただのブスだった私が「個性的」になり、大嫌いだった鷺鼻が「外人みたい」になる。気になってた平たい胸や身長も「モデルみたい」って言われて、もう、なんていうか、実家にいた頃のコンプレックス帳消し。

中でもやっぱりすごいのは、男の人の変化。前は「物か」ってくらい無視されていたのに、メイクしてると「おっ？」ってなって、にっこり微笑まれる。道を聞いたら店の外まで出て教えてくれるし、なんなら地図まで描いてくれる。飲食店では「サービスです」ってデザート出てきたりするし、なんかもう違う世界にいるような気分。(13)

このように、男性から女性として対応される経験は、ミキにとっては、女性としてパッシングが成功していると実感することにつながる。その積み重ねの結果、ミキと初めて出会う人の大半が、ミキをトランスジェンダーと気づかず、「鼻高くて、横顔がきれい」「背が高く、脚が長くて、モデルさんみたい」(73)と表現する。また、トランスジェンダーであると告げた相手からは、「女装の男っぽくないし、気持ち悪さもないし、すげえ自然」(32)「すごい完成度」(78)「本当に肌が綺麗だよ。毛穴とか見えないし」(262)と評価されたりしている。まさに、「一瞥で「本当」に「ノーマルな外見」を持つ者だと見てもらうことを、達成し続ける」(鶴田 2004)ことが可能になっていると言える。

2-4. 「天然ものかつ、未舗装」の悩み

一方ミキは、整形も性別適合手術もしていない「天然ものかつ、未舗装」(273)であり、それに対する揺らぎや悩みがある。

自分が、どういうジャンルにいるのかはわからない。女の子になって、女の子と愛し合うのが理想だけれど、かといって股間のものを憎んでいるというほどでもない。できたら、女の子のものの方がいいなあ、というレベル。

いつか手術して、と思うこともあるけど、それもなんとなく思いきれない。だってこのままでも、私はそこそこ幸せだから。(85)

現状に対して「そこそこ幸せ」と感じ、女の子になるために努力しているものの、「戸籍や外科的な努力をしていないから、全力とは言えないかもしれないけど」(328)と語ったり、「宙ぶらりん。ゲイやレズになりきれなくて、でもヘテロでもない」という自身の現状を「半端者」(85)と評価している。特に、加齢を伴う将来への不安を感じている。

この先どうやって生きていくのか、これっぽっちもわからない。お手本になる人もいない。それにそもそも、歳をとっても女子っぽくられるかどうかかわからない。(85)

若くなくなって、女装がキモくなったら誰も相手にしてくれない。(88)

将来に対する不安を抱えつつも、「でも、それなら楽しまなきゃ損」(85)と、今を「女の子」として楽しもうとしていることがわかる。

このようなアイデンティティの変化を経たミキは、どのようなファッションをしているのだろうか。次節ではミキのファッションの特徴を検討する。

3. 「女の子が女の子の服を着るのは、日常」—ミキのファッション変遷

3-1. 「綿」から「化繊」へ—「女の子」のファッションの模索

ミキが「女子っぽいファッション」をし始めるのは、中学生から高校生の始め頃である。当初は、女子のファッションを楽しむというよりは、アイデンティティの混乱に合わせて、服装選択にも揺らぎが見られる。

女子っぽい格好をしたいはずなのに、「それはおかしい」って知識と理性がブレーキをかける。で、しょうがなく、チェックのシャツをスカートっぽく腰に巻いたファッションに着地する。あるいは、頭にリボンをつけたかったのに、妥協して前髪をあげるだけのメンズカチューシャを買ってしまう。

ファッション的には、ただのロック系。だから、友人からは何も言われなかった。(205)

知識と理性が「女子っぽい格好をしたい」というミキの感情を抑圧し、メンズファッションの「ロック系」というジャンルに分類されるようなファッションで折り合いをつけるのが精いっぱいであることがわかる。次の段階になると、自分でリメイクをするようになる。

女の子の服が着たくて、でもどうしたらいいかわからなかったあの頃。まず私は、自分の知ってる素材でできた服に手を出した。綿だ。

ピンクっぽいTシャツの見頃を絞ってタイトにし、デニムを股下で切ってスカートにリメイク。店に行く勇気もなく、通販が家族にバレることを恐れた私のファーストチョイス。振り返るだに、涙ぐましい手作り感。(331)

この時期は、家族にカミングアウトをする前であることがわかる。ピンクという色味を選択し、デニムを自力でスカートにリメイクしたものを、家族にも見つからないように、自室でこっそり着用していたことが想像できる。

専門学校に進学し東京に上京してから「ちゃんと全身コーディネートをした」(117) ミキは、店頭で初めて女の子の洋服を買った様子を次のように述懐している。

うちみたいな店に入って、セール品のラックから慌てて選んだのは、フリル付きのブラウスとミニスカート。化繊の生地におそろおそろ腕を通したときの、あのひんやりとした感触。ミニスカートの、心もとないほど自由な感じ。ああ、これが女の子のお洋服だって、すごく感じた。(331)

今までは「綿」しか着用したことなかったミキが、初めて「化繊」に袖を通した時の高揚感と解放感が語られている。そして、「ブラウス、スカート、ニット。色味は白と紺がベースで、アクセントはパールや金」(329) という「失敗しないパターン」(330) の色と服の組み合わせを経験し、「女の子が女の子の服を着るのは、日常だから」(58) という現在のファッションを確立する。

3-2. 「服を選ぶのは毎日ホント悩む」—現在のファッション

ミキは専門学校で服飾学科を専攻し、服選びが得意と語るように、もともと服に興味や関心が高い。また、勤務先が「今流行の安くて可愛い服を、シーズンごとにジャンジャン消費させるタイプのアパレルメーカー」(55) で、季節を先取りした商品開発や商戦の展開などを職場の仲間と考える描写もあり、ファッションの動向を敏感に察知することが求められる職業であるといえる。こうした理由から、ミキは服に対する意識が非常に高く「服を選ぶのは毎日ホント悩む」(8)、「さあ、何を着ていこう？」(64)、「明日は何を着ようかな」(357) と、しばしば服装について考えている。以下では、仕事、合コン、オフの3つの状況に分けて、ミキがどのような服装をしているかを分析していきたい。

3-2-1. 「先取りするか、ジャストタイムで着こなすか」—仕事の服装

ミキは季節や気温を敏感に意識してコーディネートをしている。ここでは、入社時の服装を見ていこう。ま

ず、夏の終わり頃の出勤準備の場面である。

服を選ぶのは毎日ホント悩む。夏が終わりかけているこの季節は、早めの秋物で先取りするか、ジャストタイムで着こなすかがまずポイント。スマホで今日の気温をチェックすると、まだ少し暑いみたい。よし。だったらフレアタイプのショーパンにしよう。足には、ちょっとだけ自信がある。

トップスは、やっぱりエアリーな素材のブラウス。でもそれだけだと上下ふわふわでボケるから、カーキの七分袖ジャケットで引き締めてみる。よし。

コーディネートが決まったら、次はメイク。そういえば昔、まだメイク慣れてない頃はよく、先にメイクしちゃって失敗したっけ。「あっ！パジャマ前開きじゃない！」みたいな、ね。

どんなに急いでも、とにかくベースはしっかり。そこをちゃんとしないと、午後から夜にかけてめんどくさいことになるから。あとアイメイクは絶対ね。派手っぽいつけ睫毛は、職場的にNG。だってほら、テクに偏ったメイクって、一般的じゃないでしょ？

髪は、とりあえずゆるパーマかかっているからあんまり工夫しなくていい。オフのときならいろいろ遊ぶけど、ウィークデイは定番的に下ろしてる。

言ったら、全体的にゆるふわモテ系。でもそれだけじゃ女子ウケが悪いから、目と唇にはクールさもプラス。そうしないと、カーキのトップスが浮くしね。

靴も軽く悩んだけど、ちょっと太めのヒールにした。足のサイズが大きいからいつもデザインで悩むんだけど、これは久々のヒット。太いヒールの安定感とごつさが、ふわふわ系といいバランス。

最後に鏡の前で、全身チェック。くると回ると、ショーパンのフレアがふわりと広がる。それが嬉しくて、つい首回りにスモーキーなピンクのスカーフなんかも追加してみたりして。

ふわふわ、ゆらゆら。こういう服を着るたび、女の子っていいなって思う。(8-10)

服装を考える前段階として、「早めの秋物で先取りするか、ジャストタイムで着こなすか」を基準に起きながら、「今日の気温をチェック」している。そして、気温が高いことを確認した上で、「ジャストタイムでの着こなし」に基づく服装選びが始まる。まず、ショート丈のボトムスにすることで、「ちょっとだけ自信がある」足を露出し美脚を演出していることがわかる。また、フレアタイプのショートパンツを選ぶことで、ヒップに丸みとボリュームをもたせている。トップスについても、エアリーな素材のブラウスでバストにボリュームをもたせることで、丸みを演出していると考えられる。また、ミキの解説から、アウターをカーキの七分丈ジャケットのようなタイトなシルエットで深い色合いのものにすることで、全体のふんわりとしたシルエットを引き締め、メリハリのあるコーディネートに仕上げていることがわかる。加えて、ブラウスとジャケットというフォーマルなアイテムを取り入れることでボトムスのカジュアルさを抑え、会社という場所に合ったコーディネートに工夫していると考えられる。最後に、クールな印象の太いヒールを選ぶことでブラウスとボトムスのキュートな印象を和らげバランスの良いコーディネートに仕上げていることがわかる。

次に、寒い季節にミキが会社で働く服装を見ていこう。ミキは、会社のミスにより急遽、電車で1時間半以上離れた場所に謝罪に向かうことになった。

時計を見ると、ぎりぎり午前中。目的の場所へ往復すると、帰りは遅くなるだろう。家に戻っている時間はない。

歩きながら、店のウインドウに映る自分をチェック。

アウターは、ベージュのトレンチコートにダークブラウンのブーツ。基本中の基本な組み合わせだけど、まあシルエットはキレイ。アクセントは、コート裾からチラ見えする赤系チェックのスカート。インナーは、モヘアすぎないふんわりとしたニットにジャンクパールのネックレス。偶然ブリティッシュに寄せていたの

は、ラッキーだった。

(ま、そこそこちゃんとみえるか)

謝りにいくのに、ちゃらい格好をしていたら火に油を注ぎかねない。(184)

このコーディネートはミキにとって、「謝罪に行くためのコーディネート」ではなく、「会社で働くためのコーディネート」だと考えられる。「コート裾からチラ見えする」との表現から、膝下丈のスカートを着用していると思われる。「先取りするか、ジャストタイムで着こなすか」を考えた結果、寒い気候に適したコーディネート³をしていたのではないかと考える。

3-2-2. 「脚見せつけコーデ」と「体型カバー」—合コンの服装

ミキは季節だけではなく、場所の雰囲気や会う相手に合わせてコーディネートを考えている。ここでは、居酒屋でのカジュアルな合コンとタワーマンションでのリッチな合コンのコーディネートを比較する。

まずは、秋に開催された、居酒屋でのカジュアルな合コンのシーンで登場する服装をみていこう。

リボンタイのついたタイトなブラウスに、フリルのついたショーパン。に加えて、寒さは無視してリボンのついたローヒールパンプス。人呼んで「脚見せつけコーデ」。

顔や胸に注目されるのを避ける上で、これはとっても有効。

(でも、こういうところではほとんどバレないんだけどね)

薄暗い間接照明に、初対面の相手。声ばかりはどうしようもないけど、「ハスキーなの。」って言うておけば、たいがいの男はだまされる。男はこういうところ、本当にちょろい。

でも、女子はチョロくない。(66)

季節や気温に敏感なミキが「寒さは無視」してリボンのついたローヒールのパンプスを着用した「脚見せつけコーデ」をしている。このコーディネートは、「顔や胸に注目されるのを避ける」効果がある。ミキはこの合コンで、自身がトランスジェンダーであると話すつもりはないことがわかる。そこで、トップスの露出を控え、自身の武器である脚に注目が集まるコーディネートを選び、男性の身体であるとわからないようなシルエットを演出していると考えられる。加えて、このコーディネートには「キュートさ」というテーマがあると思われる。どのアイテムもリボンやフリルといった装飾がされている。また、ローヒールのパンプスを選ぶことで、高身長というクールなポイントを控えめにしていると考えられる。

次に、春の終わりから、初夏になる前頃に、タワーマンションで開催された合コンでの服装をみていこう。

春の終わりから、初夏になる前あたりが一番好き。

着るもののバリエーションが豊富だし、靴だって選び放題。夏と違ってメイクもさほど崩れない上、秋冬みたいに静電気も起きないから、ヘアスタイルも色々出来る。

と、いうわけで。

私は鏡の前で、考え込む。

(今日の気温は、平年並み。てことは、長袖プラス羽織もの)

いつもだったら、白っぽいブラウスとスカートと、ショート丈のジャケット。そこに色味を加えたり、丈を変えたりはするものの、まあお仕事の楽なパターンのコーデを選びがち。

³ ミキは、「夏服はやっぱ胸のなさが際立ってしまうので、苦手意識がある。薄手のシャツやタンクトップの時は仕方なくパッドを盛るけど、それはできるだけやりたくない。蒸れるし」(307)と、夏服に対して苦手意識を持っている。

でも、今日はお仕事の後に「援護射撃」がある。

そこで私は、フリル多めのブラウスを手に取る。その上から、ジャンクパールのネックレス。スカートは、パープルブルーのフレア。丈は、流行りのミモレ。膝までであるのが、上品な感じ。

(でも、上品なだけじゃつまんない)

少し悩んで、ブラウスをカットソーに変えてみる。肩出して、鎖骨の見える感じがセクシーなデザイン。ジャケットを着ている分にはわからないから、使い勝手がいい服だ。

肩を出して、ウエストを絞って、裾が広がるスカート。これで体型のカバーは完璧。(233)

タワーマンションでの合コンに参加する目的は、友人であるかおりの「援護射撃」であり、参加資格が高学歴高収入の男性に限定されている。また、会社を退勤した後に直接会場に向かう必要があるなど、季節や気温以外にも、複数の条件を考慮しながらコーディネートを考える必要がある。そのため、鏡の前で考え込んだり、コーディネートに悩むミキの様子が描かれている。具体的には、一度「フリル多めのブラウス」を手に取ったものの、「上品なだけじゃつまんない」と悩み、「セクシーなデザイン」の鎖骨の見える肩出しカットソーに変更する。

このコーディネートには、「TPO」「体型カバー」「援護射撃」という3つの特徴が読み取れる。まず、「TPO」とは、高学歴や高収入の男性が参加するタワーマンションでの合コンといったフォーマル寄りの場にふさわしいコーディネートであるという点である。「脚見せつけコーデ」のようなミニ丈のスカートでは、カジュアルに寄りすぎてしまう。そのため、フォーマルな印象のミモレ丈のスカートを選んだと考えられる。次に、「体型カバー」であるが、「ミモレ丈」の場合、「脚見せつけコーデ」とは異なり、脚に視線を集めることができない。そのため、全体のシルエットで自身の男性としての体型をカバーする必要がある。そこでミキは、「肩出し」「ウエスト絞り」「裾が広がる」X型のシルエットになるように服装を組み合わせ、胸周りや腰回りの「体型のカバー」を完璧に行っている。さらに、「援護射撃」は、あくまで主役は友人のかおりであり、自分は付き添いとして合コンに参加するという立場から、目立ちすぎない服装にしたのだと考えられる。以上から、ミキは季節や気温だけではなく、場所の雰囲気や会う相手に合わせつつ、自身の体型をカバーするコーディネートを考えていることがわかる。

3-2-3. 「足のライン」と「メイク」—オフの服装

自宅を中心としたオフでのミキの服装にはどのような特徴があるのだろうか。ミキのオフの服装が描かれている場面が2つある。ひとつは、高山田(別名ミニーさん)というミキと後藤の高校時代の同級生が自宅に遊びに来た場面である。ミキは「ロングパーカーと、パイル地のホットパンツ。足には、防寒のためのハイソックス」

(119)という部屋着に着替えて、ミニーさんに対応している。ハイソックスは「足のラインは綺麗に出る」と、美脚効果を意識していることがわかる。

ミニーさんは、当初、トランスジェンダーとして過ごすミキに対して暴言を吐き悪態をついていたが、実はミキがうらやましくなり、自分もミキのような女性の服装をしたいということがわかる。そこでミキはミニーさんの全身コーディネートをすることになる。その後、同居人の後藤の提案で、急遽3人で夜中のコンビニに買い物に行くことになった。ミキは、部屋着のロングパーカーの「上にざっくりとしたゲージのセーターを羽織り、タイツとミニスカートを合わせた。上着は(中略)ハーフ丈のダッフル」(152)で外出する。

ここでもミキは脚を露出するコーディネートをしている。トップスにロングパーカーとゲージのセーターを着用し、さらにハーフ丈のダッフルコートを着ることで防寒と季節感とを演出し、上半身にボリュームを持たせている。そして、ボトムをミニスカートにして脚の露出を多くし、シルエットのバランスをとっている。

もうひとつは、オフで予想外の事態が生じ、時間がない中でコーディネートをする様子も描かれている。タワーマンションの合コンで知り合ったマナミと、マナミの婚約者のケンイチが、急にミキの家へ乗り込んでくるという場面である。

どうなるかわからないときは、とにかく動ける格好。てことで選んだのは、タイトなカッティングのニットワンピースに黒いレギンス。頭からかぶって、さっと全身を整える。メイクは時間がかかるから、アイラインとリップだけ。(336)

このコーディネートでは「動きやすさ」と「時短」を重視したと考えられる。何かあったときに俊敏に動くことができるという「動きやすさ」と、身支度する時間がほとんどない状況でも頭からかぶれば瞬時にコーディネートが完成するという条件を満たす服装として、ニットワンピースとレギンスが選んだと考えられる。

また、「アイラインとリップ」とはいえ、他者と会う際に必ずメイクをするというミキの姿勢が現われている。同居人の後藤と初めて会ったときに「サービスで、すっぴんにしてあげた」(30)と後藤に語っているように、他者と面会したり外出する際にはメイクは欠かせないことが推測される。

4. 結びにかえて

本稿では、小説『女子的生活』の主人公であるミキに着目して、理想とする女性像とミキが選ぶファッションの分析をしてきた。これまでのミキの服装を一覧にしたものが表である。

表 ミキの服装一覧

TPO	会社		会社 (謝罪)	合コン (居酒屋)	合コン (タワーマンション)	コンビニへの買い物	部屋着	家
	夏の終わりにかけ	秋	冬	秋	春の終わりから初夏になる前	冬	冬	秋
トップス	エアリーな素材のブラウス	オフホワイトのニットのボンチョ	モヘア過ぎないふんわりとしたニット	リボンタイのタイトなブラウス	鎖骨の見える肩出しカットソー	ロングパーカー+ざっくりとしたゲージ編みのセーター	ロングパーカー	タイトなカッティングのニットワンピース
ボトムス	フレアタイプのショートパンツ	チェックのスカート	赤系チェックのスカート	フリルのついたショートパンツ	パープルブルーのミモレ丈のフレアスカート	ミニスカート	パイル地のホットパンツ	
靴下						タイツ	ハイソックス	黒いレギンス
靴	太いヒール	ブーツ	ダークブラウンのブーツ	リボンのついたローヒールパンプス				
アウター	カーキの七分丈ジャケット		ベージュのトレンチコート			ハーフ丈のダッフルコート		
アクセサリ	スモーキーなピンクのスクarf		ジャンクパールのネックレス		ジャンクパールのネックレス			
脚の露出度	高	不明	低	高	低	高	高	低

トランス女性のミキは、アメリカ映画に登場するような「自由で強くて可愛い女の子」を理想としており、驚鼻で平たい胸と高身長という自身のコンプレックスを、日本人離れしたモデルのような外見という新たな意味づけを知ることで、強みに変えていった。さらに、ミキの服装分析から、季節を先取りするかジャストタイムかどちらかの服装を原則としつつ、ある時には「脚見せつけコーデ」といった脚を強調する方法で、またある時には服装を組み合わせることで全体のシルエットを X 型にすることで、自身の体型をカバーし、丸みと華奢さを演出していることが明らかとなった。さらに、周囲の反応からは、ミキは「一瞥で「本当に」「ノーマルな外見」を持つ者だと見てもらうことを、達成し続ける」(鶴田 2004) というパッシングを実践していると言えよう⁴。

ミキのように「女子」として完全にパッシングするために、自身の体型をカバーするファッションを敏感に実践するトランス女性は、小説の中にとどまることではない。2022 年 3 月、男性として生まれ現在は女性として生きる青木歌音氏がプロデュースするファッションブランド「cashya」がローンチされた。肩幅が広い人でも華奢見えするデザインの「華奢見えワンピース」、首周りから肩の線にかけて華奢に見えるよう設計された「華奢見えブラウス」、女性らしいシルエットになるよう、ウエストのラインがきれいに見えるようデザインされた「華

⁴ 実際のトランス女性では、髭などの体毛の処理がパッシングをするうえで大きな比重を占めることが指摘されている(福岡・黒川 2007)。『女子的生活』では、ともちゃんが髭をそるという描写や、ミニさんが体毛の生えた状態でニーハイを着用し SNS にアップしている描写があったが、ミキについては記述がなかったため不明である。

奢見えスカート」の3種類が発売された。青木氏は、「自分の体型をカバーする服がいつも見つかりませんでした。素敵デザイン！と思い試着しては落胆する日々が続いていました。そこで、自分がほしい服を自分でつくればいいんだ！と思い、cyashaを立ち上げようと決めました」とコメントする⁵。まさに、ミキのように「自分の体型にあった、自分の心の性を表現する服装をしたい」という願いを具現化する動きであるといえよう。これは、「性の標識性や表象を有しない服装」でも「男らしさ」の多彩さを打ち出したり、「女らしさ」の幅を増幅する服装でもない、トランス女性特有の悩みを解消するファッションである。このような、それぞれのセクシュアリティの人たちが望むファッションの創出が、今後ますます求められていくと思われる。

【参考文献】

- 土肥いつき、2019、「トランスジェンダーによる性別変更をめぐる日常実践—あるトランス女性の学校経験の語りを通して—」『社会学評論』70(2):109-127.
- Finkelstein, Joanne., 1996, AFTER A FASHION, Melbourne University Press. (=成実弘至、2007、『ファッションの文化社会学』せりか書房)
- 藤田結子・成実弘至・辻泉編、2017、『ファッションで社会学する』有斐閣.
- 福岡安則・黒坂愛衣、2007、「トランスジェンダーを生きる—ある40代MtFのライフストーリー—」『日本アジア研究』4:41-78.
- Mardell, Ashley., 2016, THE ABC'S of LGBT+, Mango Media. (=須川綾子、2017、『13歳から知っておきたいLGBT+』ダイヤモンド社)
- 新實五穂、2019、「「ジェンダーレス」な服飾における性差—全国紙三紙の掲載記事を対象として—」『人文科学研究』15:41-51.
- 小川麻衣、2018、「ファッションとジェンダー—“フェミ男”現象と「男らしさ」の考察—」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』49:49-56.
- 坂木司、2019、『女子的生活』新潮文庫.
- 鶴田幸恵、2004、「トランスジェンダーのパッシング実践と社会学的説明の齟齬—カテゴリーの一瞥による判断と帰納的判断」『ソシオロジ』49(2):21-36.
- 、2009、『性同一性障害のエスノグラフ—性現象の社会学』ハーベスト社.
- 付記 本論文は、2021年度神戸女子大学家政学部家政学科卒業論文「『女子的生活』にみるジェンダー表現」(雄崎那知)を大幅に加筆修正したものである。

⁵ 「ニュースリリース 元男の子動画クリエイター青木歌音がプロデュースするブランド「cyasha」がローンチ！男の子だった名残をカバーするワンピースやブラウスなど3種のアイテムを展開～UUUMとAnyMind提携によるD2Cブランド企画～」<https://www.uuum.co.jp/2022/02/22/77139>, 最終アクセス2022.02.28